

正教聖歌の伝統

第2回 使徒たち～迫害の時代—奉神礼は使徒の教会とのリンク

こんにちは。正教聖歌の伝統第2回です。前回、「正教は昔からの伝統を守っていると言いますが、どれくらい昔？」という話をしました。「昔の伝統を守っている」と言っても、今の聖体礼儀が、昔と「全く同じ」ではないのは、ご存じのとおりです。

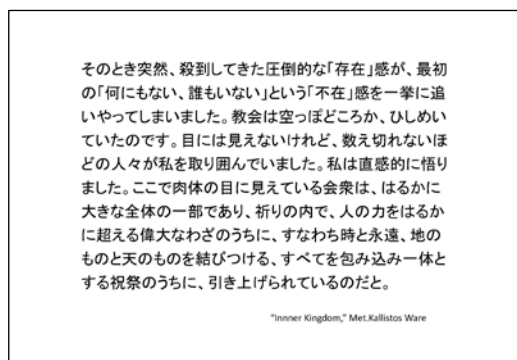
でも正教会は確かに昔の伝統を守っています。昔の教会とつながっています。発掘調査や歴史研究の成果によって、昔の教会がどんなお祈りをしていたのかが少しずつ明らかになってきましたが、明らかになればなるほど、私たちの教会は昔の教会とつながっている、一体であることを感じます。

この講座では、正教徒にとってはよく知っている身近な例を挙げながら、どのように昔の教会とリンクしているかを解き明かしていきます。昔の教会とつながる扉の鍵、秘密の鍵は奉神礼、礼拝、お祈りのなかにあります。正教信徒はあまりに慣れ親しんでいて、そんなに「大したこと」と意識していませんが、実はすごいことなのです。これから、その小さな鍵を探して、時間を超えるリンクの扉を開けてみたいと思います。



Slide 使徒

まず教会の始まり、ハリストスのお弟子さんたちは集まって、どんな聖歌を歌っていたでしょう。聖書やいくつかの文献に書き残されたことを見ると、お祈りの時、何かを歌っていたことは確かですが、どんな歌をどんな風に歌っていたのかわかりません。特に、音に関しては、楽譜、ネウマという記号で記録が始まるのは9世紀頃からで、楽譜を見て再現できるのは12世紀以後のことです。それまで口伝えだったので、資料からは読み解くことができません。広く歌われていた歌ほど、後代になるまで記録がありません。



Slide 晩餐

ハリストスやお弟子さんたちが歌っていたという描写を聖書の中に探してみましょう。

まず最後の晩餐の記述。正教会では「機密の晩餐」と呼びます。晩餐のあと「一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山に出かけた」とあります。日本正教会訳だと「既に詠いてエレオン山に往けり。」エレオンとはギリシア語でオリーブのことです。

機密の制定、ハリストスがこうしなさいと教えた晩餐のときにも、



Tra2 正教聖歌の伝統 使徒たち～迫害の時代

何かを「歌っていました」。何を歌ったかは書かれていません。正教会の伝統ではしばしば「歌う」は「祈る」と同義語として用いられますから、「詠う」「唱える」の方が近かったかもしれません。

Slide 使徒書簡の歌

使徒経の中にも「歌だったろう」と思われる箇所がいくつかあります。たとえばパウロのエフェスの教会への手紙、エフェスの人々に、「古い、死んだような生き方を捨て、光の子として生きなさい」と励ました手紙です。その終わりの方、5章14節です。

♪「寝ぬるもの起きよ、死より復活せよ、ハリストス爾を照らさん」(エフェス 5:14)。いかにも歌ですね。

どこかで聞いたことがあるような気がしませんか。私は二つの歌を思い出しました。ひとつは大斎の始まり、第1週目のアンドレイのカノンで歌われるコンダク。

Slide アンドレイのカノン

「我が霊よ、我が霊よ、起きよ、何ぞ眠る、終わりは近づく、爾擾れん、故に寤めよ、在らざる所なく充たざる所なきハリストス神を宥めん為なり。」

すっかり神を離れている自分のたましいにむかって、再臨の日は近い、目覚めて、備えよ」という歌です。「神の元へ戻ろう、復活祭を目指そうと」歩み始めた最初の週に歌われます。500年ぐらいのちのビザンチンの聖歌者ロマノス、聖歌者ロマンが作ったと伝えられます。

Slide 復活祭のカノン

もう一つは、復活祭のカノン。真夜中、光にあふれた聖堂で喜びの歌がはじけます。「今、天と地と地獄とは皆光に満たされたり、故に万物はその固めなるハリストスの起くるを祝うべし」。主は復活した、私たちが起こされ、主の光が満ちあふれると歌います。こちらは8世紀の聖歌作者ダマスクのイオアンの作です。

どちらの歌も、同じテーマを違う角度から歌っています。正教会の聖歌にはこういう言い換え、パラフレーズの歌がたくさんあります。今回はロシアの古いメロディを例にあげて、メロディの「使い回し」を紹介しましたが、歌のことば、歌詞についても「使い回し」は普通のことです。

始めの教会で行われていた歌が、集まってお祈りしながら、口伝

使徒書簡の中の歌



たとえば

「寝ぬるもの起きよ、死より復活せよ、
ハリストス爾を照らさん」(エフェス5:14)

ほかにも:
フィリピ2:11、1テモテ3:16、6:15、11テモテ2:11、
黙示22:17、など

パラフレーズ 1

「寝ぬるもの起きよ、死より復活せよ、
ハリストス爾を照らさん」(エフェス5:14)



大斎第1週晩堂大課のコンダク

「我が^{たましい}霊よ、我が^{たましい}霊よ、起きよ、何ぞ眠る、
終わりは近づく、爾^{みだ}擾れん、故に^ま寤めよ、
在らざる所なく充たざる所なきハリストス神
を宥めん為なり。」 聖歌者ロマン(6世紀)の作

パラフレーズ 2

「寝ぬるもの起きよ、死より復活せよ、
ハリストス爾を照らさん」(エフェス5:14)



復活祭のカノン 第3歌項

「今、天と地と地獄とは
皆光に満たされたり、
故に万物はその固めなるハリストスの起
くるを祝うべし」 ダマスクのイオアン(8世紀)作

Tra2 正教聖歌の伝統 使徒たち～迫害の時代

え、聞き覚えで伝えられ、お祈りの中で歌うことで感動がよみがえり、共有され、ふたたびインスピレーションが与えられて新しい歌が作られてゆきました。同じイメージはすべての教会に共有されています。

やがて、これらの歌は8世紀から9世紀になって、分厚い祈祷書にまとめられました。八調経や三歌斎経などです。

Slide 真ん中で祈る

さて今、神父さんたちは『奉事経』という祈祷書を見て祈りますが、このころは、お祈りは即興でした。2世紀末から3世紀の人、カルタゴのテルトリアヌス(c155～220)は「聖書の言に感じた者、また自分の心の底から訴えたい者は、中央へ出て、神に向かって歌え」(Apologeticus, chap.39 § 18)と述べています。

今風に言えば、インスピレーションを受けた人が、集まった人たちの真ん中に立って、即興で祈りを歌ったということでしょう。余談ですが、インスピレーションの語源はスピリット。スピリットは霊、正教会では神^oです。賜物を与えられた人が神の霊、聖霊、聖神を受けて、語り、祈り、歌いました。コリント人への第一の手紙14:26にも書かれています。

祈りのことば、最初は即興でしたが、やがて選ばれ、記録され、定式になり、『奉事経』という本にまとめられました。昔は説教も歌うように唱えられ、「歌う説教」がコンダクなどの歌になっていったと言われます。

今、祝文の大半は黙誦、神父さんが黙読し、最後の部分だけ、「けだーし」と大きな声、高声で唱えますが、実はこの黙誦部分に最も大切な「教会」の祈りのエッセンスがあります。なぜ、黙誦になってしまったのかは、またあらためてお話しします。

Slide 応答

さて、司祭が祈りのことばを唱えたら、他のメンバーはどうしたか。すかさず「アミン、そうで～す」と答えました。あるいは「ア riluiya、ア riluiya、ア riluiya」と唱和しました。歌のことばの最後を復唱することもありました。私たちが今でも歌う、応答唱、アンティフォン、連祷など、「応答」の祈り方が古くからある方法であることがわかります。

112年ごろのトルコ北部のビテュニアという街のローマ総督プリニウスが皇帝に書いた手紙の中に、「この地のキリスト教徒は神やキリストへの賛歌を交唱、つまり掛け合いで歌っている」という記

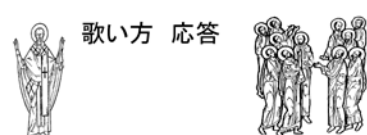
カルタゴのテルトリアヌス(c155～220)
「聖書の言に感じた者、
また自分の心の底から訴
えたい者は、中央へ出て、
神に向かって歌え」
(弁証論 39章 § 18)



Inspiration < Spirit 神^o
霊

参照: 1 コリント 14:16

歌い方 応答



..... アミン
..... ア riluiya
..... その他

Tra2 正教聖歌の伝統 使徒たち～迫害の時代

述があります。

ほかにも、聖書の時代、使徒たちの教会の姿を今のお祈りの中に探してみましょ。使徒経を見てみましょ。

SLIDE パウロの挨拶

さて「使徒経」の大半は、聖使徒パウエル（パウロ）の手紙です。パウロはたくさん手紙を書きました。手紙ですから、挨拶文があって、冒頭では「あなたがたに平安があるように」と呼びかけ、終わりにもみなさんの「平安」を祈る詞がついています。これを真似して日常生活の中で使うのにはちょっと気恥ずかしいという方もおられますが、奉神礼の中では全然違和感なく、自然にやりとりしています。

たとえば手紙の結びの部分。

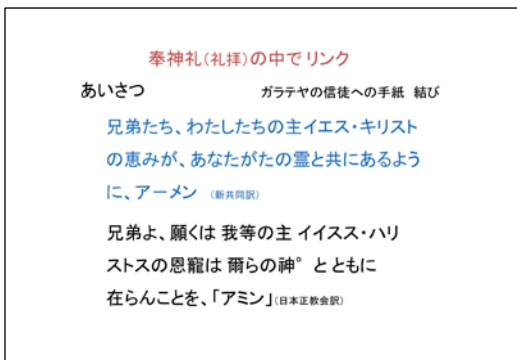


Slide 手紙の結び

「兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン（新共同訳）」とあります。正教会訳ではこうです。これを、神父さんに言ってもらいましょ。

「願くは我等の主イエス・ハリストスの恩寵は爾らの神^oとともに在らんことを、アミン」。ほら、私たちはごく自然に「アミン」と挨拶を返します。

正教会のお祈りの中にはこういう「応答」、「会話のやりとり」がたくさん出てきます。挨拶、やりとりも「普通の話し方」ではなくて「歌うように」唱えられます。



Slide 使徒経 福音経

次に、使徒経、福音経が読まれるときのことを思い浮かべて下さい。正教会では四つの福音書を集めたものを『福音経』、使徒の活動記録である聖使徒行実と手紙を集めたものを『使徒経』と呼びます。「経」お経の「経」という字がつくのは、お祈りで使うために本にまとめられたものだからです。



Slide 聖入

福音経の場合は小聖入の時、このように行列を作って、頭上に掲げて、持ち出されてきます。使徒経は「聖なる神」のときに出てきます。



Slide 聖入のコース

今は至聖所から出てきて、至聖所に戻る短い行進ですが、(緑の線です)、昔は別の建物の保管庫から集まりの場に持ち出してきました。大切な聖書や使徒の手紙は、官憲に摘発されるのを畏れて別の部屋に隠してあり、集まりの時にだけ持ち出され、読む役目を与えられた人が集まりの真ん中で読みました。



Slide ユスティノス

2 世紀の人、ユスティノスは集まりの様子をこう記しています。「太陽にちなんで呼ばれる日（日曜日）に、町や村に住む私たちの仲間はみな一つの所に集まり、時間の許す限り、使徒の記録、預言者の書物を読む。朗読者が読み終わると司会者がこれらの美しい教えを学ぶように勧め励ます話をする。それから皆一緒に立って祈る。祈りがすむと先に述べたように、パンとぶどう酒と水が運ばれ、司会者は祈りと感謝を自分に与えられた力によってささげ、皆は「アミン」と答える。(『第一弁明』 67 : 3-5)

太陽にちなんで呼ばれる日に、町や村に住む私たちの仲間はみな一つの所に集まり、時間の許す限り、使徒の記録、預言者の書物を読む。朗読者が読み終わると司会者がこれらの美しい教えを学ぶように勧め励ます話をする。それから皆一緒に立って祈る。祈りがすむと先に述べたように、パンとぶどう酒と水が運ばれ、司会者は祈りと感謝を自分に与えられた力によってささげ、皆は「アミン」と答える。
(教命書ユスティノス『第一弁明』67:3-5)

ここでユスティノスの言う「預言者の書物」とは旧約聖書のことですが、今ではポロキメンやア rilルイヤの句として預言的な聖詠／詩篇の抜粋が歌われるだけに圧縮されました。司会者、司祷者「美しい教えを学ぶように勧め励ます話」は説教のことです。当時は字の読めない人が多かったらうから、読む賜物を与えられた人読む、そして、主教や司祭という「教え導く」役割の賜物を与えられた人が解説する。聖書は教会で読まれ、教会の教えに従って、説き明かされるものでした。

SLIDE 聖詠と歌頌と属神の詩賦

さて、聖歌に関する話で必ず出てくる有名箇所があります。聖使徒パウエル、パウロがエフェスの教会へ送った手紙です。正教会訳で「聖詠と歌頌と属神の詩賦とを以て 口に唱え、心に和して、主を讚美せよ」、コロサイ書にも同じような内容があります。

ここで言われている、聖詠と歌頌と属神の詩賦ですが、この当時、あまり区別されずに使われていたと考えられています。パウエルもそうですが、昔の人はなんでも暗記していました。聖詠／詩篇などの旧約聖書も暗記していました。だから、話すとき、歌うとき自由自在にでてくる。今の私たちが祈禱書や聖詠経を開いて読む、楽譜を見て歌うというのは、随分違っていたことは知っておきたいと思います。

聖書の時代—あまり区別なし	後代には区別される
聖詠と PSALM 詩篇	聖詠／詩篇+旧約歌頌
歌頌と HYMNS さびび／賛歌	イムノス*、創作された歌 (トロバリなど)
属神の詩賦 SPIRITUAL SONGS	霊の歌 (喜びの歌) (ア rilルイヤなど)
とを以て	
口に唱え、心に和して、主を讚美せよ	
	(エフェス5:19 コロサイ3:16)

*西方では編文の歌、東方では編曲で祝祭的、様式化された手法で編成される教文の歌謡

ちなみに、時代が下ると、聖詠はいわゆる聖詠／詩篇に旧約聖書

Tra2 正教聖歌の伝統 使徒たち～迫害の時代

の歌を含めたもの、歌頌はギリシア語でイムノス、英語で hymn ですが、正教会では聖書以外に創作された歌、全般、たとえばトロパリ、コンダクなどを指し、属神の詩賦 spiritual song は喜びの歌、たとえばアリルイヤなどと区別されるようになります。

聖歌を研究するとき重要なのがイムノスで、正教会訳では歌頌、プロテスタントの聖書ではさんび、賛歌などと訳されます。西方では歌詞が韻文で作られた歌を指すようになりが、正教会では、聖書に含まれていない新たに創作された歌ですが、「韻文」ではなくて「散文」でした。「散文」を歌うという伝統は、正教会聖歌の性格に深く関わっています。正教会では、常に「ことば」が「主」で、音楽は「従」です。

古代教会は音楽に対し、その力を認めると同時に大変警戒していました。異教の祭礼、つまりギリシアローマ文化やアニミズムなどでは盛んに行われていた「ダンス」や「楽器」は排除されました。

Slide 大頌栄 グロリア

さて、最後に東西教会の両方で今でも歌われている古い聖歌をご紹介します。ルカ伝の 2 章 14 節「至高き・・・」、主の降誕を知らせる天使の歌で始まる歌です。正教会では「大頌栄」、great doxology 西方では「グロリア」と呼ばれる歌です。

ところでドクソロジーとは「光栄・・・に帰す」ドクサ、すなわち「光栄は」のつく歌のことです。ドクサのラテン語が「グロリア」です。頌栄の「栄」さかえは光栄のことです。光栄を歌う大きな歌だから「大頌栄」です。「光栄は父と子と聖神に帰す」もドクソロジーの一つで、小さいドクソロジー、lessor doxology と呼ばれたりします。

歌詞はこれです。正教会訳ですが、内容はほぼ共通です。冒頭の赤字はルカ伝から、緑の部分はグロリア「栄光の賛歌」と共通です。線を引いた部分は若干異なります。

至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり。

主天の王、神父全能者よ、主独生の子イイスス・ハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の祷を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独聖なり、爾は独主イイスス・ハリストス、神父の光栄を顕す者なればなり、「アミン」。

正教会では早課（朝の祈り）の終わりに、主日や祭日にだけ歌われ、普通の日には読まれます。カトリックではミサの始まりに歌われます。土曜日の晩祷で毎週歌われますが、この歌には「散文を歌う」とい

大頌栄 Great Doxology 栄光の賛歌 Gloria

至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり
(ルカ2:14)
主天の王、神父全能者よ、主独生の子イイスス・ハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。
主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の祷を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独聖なり、爾は独主イイスス・ハリストス、神父の光栄を顕す者なればなり、「アミン」。

Tra2 正教聖歌の伝統 使徒たち～迫害の時代

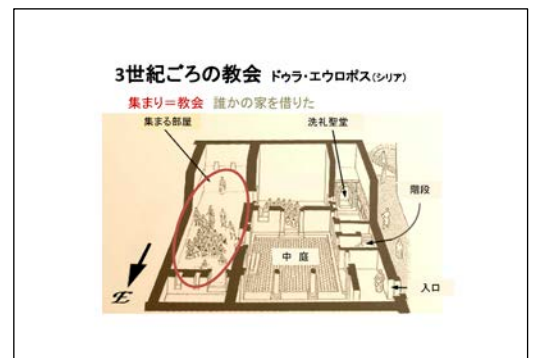
う雰囲気が残っていると思います。「散文を歌う」というテーマで、別に機会を設けてお話ししたいと思います。

Slide ドゥラエウロポス

教会を表すギリシア語、エクレシアとは「集まり」の意味です。

教会とほかの神殿との違いは、神殿では日本の神社もそうですがユダヤの神殿も含めて、「神の宿る場所」、神聖な場所は小さく、人々はその周り、外に立って祈ります。でもキリスト教では大切なのは「主の名によって集まる場所」です。建物は容れ物です。

これは、20世紀になってシリアで発掘された3世紀の教会の建物です。ローマ式の家を利用した集会所です。ふつうの建物が信徒の集まりの容れ物になっています。



Slide 集まること

主は「二人、または三人がわたしの名によって集まるところにはわたしもその中にいる（マタイ 18:20）」と言われました。ローマ時代、信徒は脅されても、禁止されても集まり続けました。集まって祈ることに特別の意味があるからです。礼拝は集まって主と出会う場所、特別のステージです。正教会はその「特別なステージ」を念入りに発展させました。祈りの場を神と出会う場所、天と地の教会が一つになる特別の場所と感じたからです。

特別の場所では、唱えられることばも普通の話し方ではなくて、歌でした。今でもそうです。正教会の礼拝はすべてが歌です。日常とはちょっと違う場所で、日常とちょっと違う衣装を着て、日常とはちょっと違う「話し方」をすることによって、特別のステージに上がりやすくしているとも言えるでしょう。

さきほど、パウロの時代と同じやりとりをお祈りの中で、ごく自然にやっている例をご紹介しました。奉神礼、お祈りの中だから、すんなりと、時間を越えて、使徒たちの時代のクリスチャンと、古代教会の人たちと一緒にやりとりできています。教会の建物やしつらえ、イコン、聖歌もそれを助けるように働きます。しかし何より、それを可能にしているのが教会に満ちあふれている聖神、聖霊です。

今回は3世紀ごろからずっと歌われ続けている古い歌「聖にして福たる」にスポットを当てて、祈りの時間についてお話しします。

